

静岡市美術館開館15周年記念

パウル・クレー展

創造をめぐる星座

旅、友情、戦争、病——孤高の画家・クレーをめぐる交流と創造の軌跡



パウル・クレー《赤、黄、青、白、黒の長方形によるハーモニー》1923年 パウル・クレー・センター

Paul Klee

Solitary and Solidary

2025.6.7 | 土 | — 8.3 | 日 |

| 休館日 | 毎週月曜日 *ただし7月21日(月・祝)は開館、7月22日(火)は休館

| 開館時間 | 10:00—19:00(展示室入場は閉館30分前まで)

| 主催 | 静岡市、静岡市美術館 指定管理者(公財)静岡市文化振興財団、テレビ静岡、中日新聞東海本社

| 協賛 | DNP大日本印刷、アイシン

| 学術協力 | パウル・クレー・センター | 特別協力 | 東京国立近代美術館



静岡市美術館

SHIZUOKA CITY MUSEUM of ART

JR静岡駅北口より徒歩3分/
しずびは夜7時まで開館



この展覧会はパウル・クレー・センターの
学術協力のもと開催しています。



【プレスリリースのお問い合わせ】 展覧会担当:伊藤・鈴木 広報担当:岡田・大庭

静岡市美術館

SHIZUOKA CITY MUSEUM of ART

〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー3F info@shizubi.jp

Aoi Tower 3F, 17-1, Koyamachi, Aoi-ku, Shizuoka, 420-0852 JAPAN

tel. 054-273-1515 (代表) fax. 054-273-1518 www.shizubi.jp

パウル・クレー展 創造をめぐる星座

この世では、私を理解することなど決してできない。
なぜなら私は、死者たちだけでなく、
未だ生まれざる者たちとも一緒に住んでいるのだから。

スイス生まれの画家パウル・クレー(1879-1940)のこの言葉は、彼の作品を売り出した画廊の販売戦略に用いられ、孤独に瞑想する芸術家としてのイメージを広めました。確かに、詩情豊かなクレーの作品は謎めいているかもしれませんが。しかし同じ時代を生きたほかの多くの前衛芸術家たち同様、クレーもまた、仲間たちと刺激を与えあったり、夢を共有したりしながら、困難な時代を生き抜いたひとりの人間でした。

本展は、スイス・ベルンのパウル・クレー・センターの学術協力のもと、同センター、バーゼル美術館、日本各地の美術館から集めたクレー作品約60点を核に、カンディンスキー、ピカソ、ミロなど同時代の芸術家たちの作品を加えた約110点で、クレーの生涯にわたる創造の軌跡をたどります。彼を取り巻く社会的な状況も視野に入れることで、多くの人や情報が構成する星座=コンステレーションのなかでクレーを捉え直す機会となることでしょう。

◎全国巡回の最終会場です◎

● 開催概要

- **開催期間**：2025年6月7日(土)―8月3日(日) 【全50日間】
- **休館日**：毎週月曜日 *ただし7月21日(月・祝)は開館、7月22日(火)は休館
- **開館時間**：10:00-19:00(展示室入場は閉館30分前まで)
- **観覧料**：一般1,600(1,400)円、大高生・70歳以上1,100(900)円、中学生以下無料
お得な一般前売ペアチケット2枚1組2,600円
*()内は前売および20名以上の団体料金(団体は来館当日に限り購入可能)
*障がい者手帳等をご持参の方および介助者原則1名は無料
- **前売券**：4月26日(土)から6月6日(金)まで販売
静岡市美術館(窓口、オンラインチケット)、セブンチケット[セブンコード:109-512]、ローソンチケット[Lコード:43352]、チケットぴあ[Pコード:687-190]、谷島屋(バルシェ店、マークイズ静岡店、流通通り店)、MARUZEN&ジュンク堂書店新静岡店、戸田書店江尻台店、中日新聞販売店
[一般前売ペアチケット 取扱場所]静岡市美術館(窓口、オンラインチケット)、セブンチケット[セブンコード:109-516]、ローソンチケット[Lコード:43944]、チケットぴあ[Pコード:687-189]、中日新聞販売店
※当日ペアチケットの販売なし
- **主催**：静岡市、静岡市美術館 指定管理者(公財)静岡市文化振興財団、テレビ静岡、中日新聞東海本社
協賛：DNP大日本印刷、アイシン
学術協力：パウル・クレー・センター
特別協力：東京国立近代美術館

● 見どころ

● 旅、友情、戦争、病— 孤高の画家・クレーの人生と創造の軌跡をたどる

音楽一家の子としてスイス・ベルン近郊の町に生まれたパウル・クレー。線描画家としてスタートした後、カンディンスキーら前衛画家たちとの出会いにより作品の抽象性を高めていきます。転機となったチュニジアへの旅行、そして友人の死と従軍を経験した第一次世界大戦。招聘されたドイツ・バウハウスでは自らの造形理論を追求するも、ナチ政権の迫害を受け故郷スイスへと亡命します。晩年は自らを襲った病と向き合いながらもその創作意欲は衰えることなく、国際的な評価も高まりました。本展では、クレーの人生をひも解きながら、初期から最晩年に至る創造の軌跡をたどります。

● 日本初公開作品を含む 約 60 点のクレー作品が国内外から集結！

クレーの出身地であるスイスのパウル・クレー・センター、バーゼル美術館ほか、日本各地の美術館から集めたクレー作品約60点が集結。詩情豊かなクレーの作品世界をご堪能ください。

● クレーと同時代の画家たちとの知られざる交流に迫る。

青騎士、キュビズム、ダダ、シュルレアリスム、バウハウスなど、同時代の画家たちの作品約50点も展示。多くの人や情報が構成する星座=コンステレーションのなかでクレーを捉え直します。

その他の出品画家/ヴァシリー・カンディンスキー、フランツ・マルク、パブロ・ピカソ、ジョルジュ・ブラック、ロベール・ドローネー、ジャコモ・バッラ、アウグスト・マッケ、ルイ・モワイエ、ジュアン・ミロ、マックス・エルンスト、ハンス・アルプ、リオネル・ファイニンガー、ラースロー・モホイ=ナジ ほか

● 全国巡回の最終会場。お見逃しなく！

愛知県美術館、兵庫県立美術館での開催を経て、当館が最終会場となります。展示内容も一部異なり、パウル・クレー《ホール C. エントランス R2》(静岡県立美術館、7/8-8/3 展示)、ロベール・ドローネー《傘をさす女性、またはパリジェンヌ》(ポーラ美術館)、ヴァシリー・カンディンスキー《「冷たいかたちのある即興」のための習作》(静岡県立美術館、6/7-7/6 展示)は静岡会場のみ出品されます。

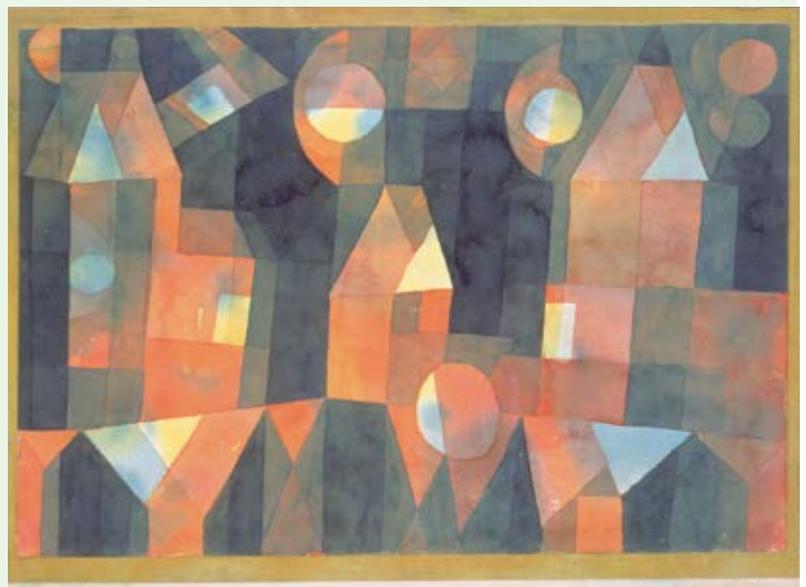
パウル・クレー 《橋の傍らの三軒の家》1922年 宮城県美術館



バウハウスの
アトリエにいるクレー、
ヴァイマル
1923年

パウル・クレー (1879-1940)

音楽一家の子としてスイス・ベルン近郊の町に生まれる。画家になるべくミュンヘンに移り、1912年にカンディンスキーら青騎士の展覧会に参加。1914年にマッケ、モワイエとともにチュニジアを旅行し、日記に「色彩が私を捉えたのだ」と記す。第一次世界大戦における友人の死と従軍を経て、1921年からバウハウスで授業を行う。1933年末、ナチ政権の迫害を受けベルンに移住。以後、アメリカでの評価を確立するも1940年に没する。



● 第1章 詩と絵画

- スイスのベルン近郊の町に生まれたパウル・クレーは、1898年に画家になる決意をし、ミュンヘンへ留学します。絵画の修業は思うように進まず、色彩を用いた絵画制作を離れ、「最も単純な表現」としての線だけを用いた作品を制作するようになります。10点組の版画連作〈インヴェンション〉を1906年のミュンヘン分離派展に出品し、クレーは芸術家としての第一歩を踏み出しました。1911年、ロシア出身のヴァシリー・カンディンスキーは、フランツ・マルクらとともに「青騎士」の最初の展覧会を開催します。クレーは友人の画家ルイ・モワイエの紹介でカンディンスキーと出会い、1912年の第2回展に17点の線描画を出品し、国際的な前衛芸術への参加を果たしました。



《喜劇役者〈インヴェンション〉より》1904年 愛知県美術館

前衛への意識 カンディンスキーとの出会い



ヴァシリー・カンディンスキー
《「冷たいかたちのある即興」のための習作》
1914年頃 静岡県立美術館 [6/7-7/6展示]

● 第2章 色彩の発見

- 1914年の春、クレーは友人の画家ルイ・モワイエとアウグスト・マツケとともにチュニジアを訪れます。《チュニスの赤い家と黄色い家》は、クレーがチュニジアで描いた30点の水彩画のひとつと考えられています。赤と黄色の家、背景の木々、人物らしき要素は簡略した形へと還元され、透明感のある色彩は重なり合っています。クレーが滞在中の日記に書き残した「色彩が私を捉えたのだ」という言葉は、この旅行が苦戦していた色彩の問題を克服した重要な転回点となったことを示しています。

しかしクレーは、チュニジア旅行の直前にすでに線描画から色彩表現へと移行していました。フランスの同時代美術への関心、特にロベール・ドローネーの絵画を賞賛し、1912年には彼のアトリエを訪ねています。クレーの色彩表現は、パリの芸術家たちとの対話やチュニジアへの旅行のなかで獲得されていきました。

旅

チュニジアへの旅 色彩の発見



《ハマメットのモチーフについて》
1914年
バーゼル美術館

日本初公開

《チュニスの赤い家と黄色い家》1914年 パウル・クレー・センター

● 第3章 破壊と希望

友人の戦死と画家としての成功



フランツ・マルク
《冬のパイソン(赤いパイソン)》
1913年 パーゼル美術館

- クレーがチュニジア旅行から戻って3ヶ月あまりが過ぎた1914年、ヨーロッパは第一次世界大戦へと突入していきます。カンディンスキーは母国ロシアへ帰国、青騎士のメンバーたちは、開戦により一瞬にして散り散りになりました。ドイツ国籍のマッケとマルクは自ら従軍し命を落とします。父親の家系によりドイツ国籍だったクレーも、1916年に徴兵を受け従軍します。友人の死、自らの従軍を経て、クレーは戦争に対する態度を複雑に

変化させていきます。この頃のクレーの作品は、戦争を直接的・間接的に主題にしながらも画面の抽象度を高めていき、その過程では自作の切断と再構成という、ショッキングな手法も採用されました。●

● 第4章 シュルレアリスム

- 第一次世界大戦の開戦後、青騎士の芸術家の多くが不在となったドイツでは、クレーの評価が高まりを見せます。終戦後、クレーはミュンヘンのゴルト画廊と契約を結び、作品の売れ行きに関わらず最低限の収入の保証を得ました。同画廊は1920年にクレーの大規模な個展を開催しました。同年出版された『パウル・クレー 生涯、作品、精神』は、クレーを地上の喧騒から離れて孤独に宇宙的な力を冥想する「彼岸の芸術家」として論じました。そうしたクレーの芸術家像は、次第にパリにも知れ渡っていきます。詩人のアンドレ・ブルトンが『シュルレアリスム宣言』(1924年)のなかで、クレーをシュルレアリスムの先駆者のひとりとして位置づけました。クレーはシュルレアリストを自称したり、その活動に積極的に加わることはありませんでしたが、クレーの自由な線描とそこから紡ぎ出される形象は、彼らの目には先駆者的に映ったのでしょう。

《鳥=島》1921年 パウル・クレー・センター



先駆者
シュルレアリスムの

日本初公開

自然研究の道



《周辺に》1930年(1935-36年加筆) パーゼル美術館

画面の四辺を大地としてさまざまな植物が根付いています。中央に描かれた太陽の光を浴びるそれらは、特定の植物というよりも光合成、養分の吸収、生長、交配といった植物の生理学的な機能を現しています。唯一描かれている鳥は、植物が根付く地上的な領域と、太陽が存在する天上的な領域の間を行き来する存在であり、芸術家の隠喩とみることもできるでしょう。

● 第5章 バウハウス

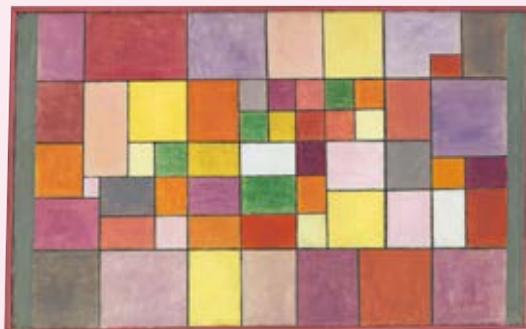
- クレーはヴァイマルに設立された造形学校バウハウスからの招聘を受け、1921年から「マイスター」として同校で授業を持つようになります。線・面・空間といった基本的な造形手段の検討から、構造、リズム、運動といった造形概念から自然研究まで、幅広い内容が論じられました。熱意をもって取り組んだバウハウスの教育は、クレーの創作活動にも影響を与えました。バウハウスでは、かつて青騎士の中心的存在だったカンディンスキーもマイスターとして招聘されます。再会した2人は互いの誕生日やクリスマスに作品を贈り合うなど、交友関係も深めました。移転したデッサウも含む約10年間のバウハウス時代のクレーは、自らの造形的な取組みを言語化、体系化させるなど様々な展開をみせました。



《北方のフローラのハーモニー》
1927年
パウル・クレー・センター
(リヴィア・クレー寄贈品)

クレーは1923年から、画面をゆるやかなグリッド状に分節し、さまざまな色彩を配置していく「方形画」と呼ばれる作品を制作しています。クレーは赤・黄・青の3原色とその間にある橙、緑、紫をひとつの円環のなかで捉え、その上下に白と黒を配置する独自に想定した色彩秩序をもとに、たえず生成変化する色の動きによってイメージを作り上げています。クレーは、隣接する色の連続性や対立する補色を行き来する運動性といったものを重視していましたが、この三次元的な色彩立体の中心点に位置する灰色は、全ての色と関わりを持つ存在です。本作ではクレーが自ら着色した額の灰色と、その灰色を介した色と色の重なりが画面全体のハーモニーを生みだしています。

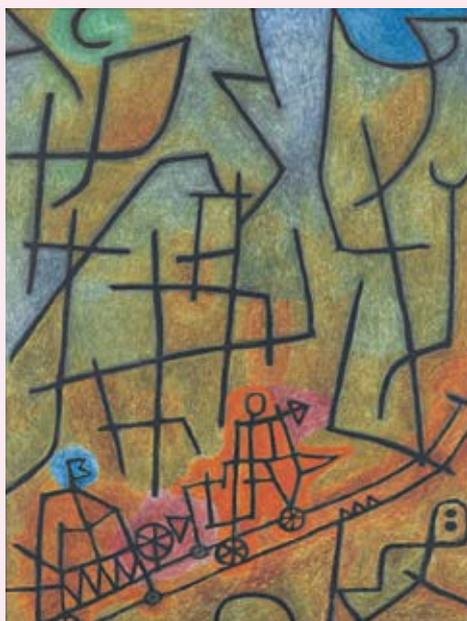
《赤、黄、青、白、黒の長方形によるハーモニー》1923年 パウル・クレー・センター



バウハウスのマイスター



《蛾の踊り》1923年 愛知県美術館



《山への衝動》1939年 東京国立近代美術館

● 第6章 新たなはじまり

- バウハウスを去ったクレーは、より制作に集中できる環境を求めてデュッセルドルフ美術アカデミーに移りました。しかしそれから間もない1933年1月末に、アドルフ・ヒトラーがドイツの首相に任命されると、バウハウスをはじめとする「非ドイツ的」な芸術への弾圧が強まり、クレーはアカデミーから停職を申し渡されます。そしてドイツ国内での活動に限界を感じ、1933年末に故郷ベルンへと亡命します。クレーは、自らの悲劇的な状況を重ねた人物像を描いていますが、さらに1935年には自己免疫疾患による症状が表れ始めます。しかし身体的な苦痛を感じながらも制作のペースを落とすことはなく、イメージと文字の間にあるような記号的な表現を用いて新たな創造の世界を歩みます。しかし体調の悪化により1940年、心不全のため、その生涯を閉じました。

予期せぬ病と途絶えることのない創造

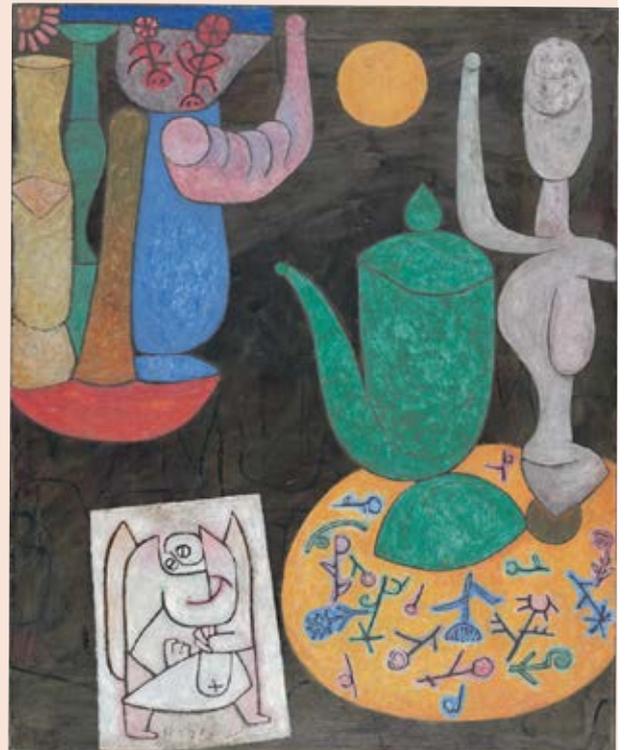


《花のテラス》1937年 東京国立近代美術館

病

クレー最後の静物画

《無題(最後の静物画)》1940年 パウル・クレー・センター(リヴィア・クレー寄贈品)



クレーが没したとき、アトリエには32点の作品が残されていました。本作はそのうちのひとつで、息子のフェリックスによって「最後の静物画」という呼称が与えられました。腕を切断された彫像、切断されて散乱し、枯れていくのを待つ花々、花瓶のなかに逆さまになって落ちていく車輪に乗った人物たちなどの表現は、死の予感に満ちています。画中画として描かれた天使の絵《天使、まだ醜い》に与えられた「まだ」という言葉は、決して到達することのできない天上的な領域を目指して、なお制作を続けるクレーの創造への意志を示しているようです。

※作家名の表記がないものはすべてパウル・クレー制作



パウル・クレー・センターと そのコレクション

パウル・クレー・センターは、世界的に著名な建築家レンゾ・ピアノによって設計され、2005年にスイスの首都であるベルンに開館しました。パウル・クレー・センターが管理する約4,000点の作品は、世界で最も重要なパウル・クレーの絵画、水彩、ドローイングのコレクションです。その中心を成すのは、クレーが没したときに手元に残した作品で、遺族たちの努力によって散逸を逃れてきました。これに、彼の制作活動と生涯の全期間に関するアーカイブ的・伝記的な資料が加わります。パウル・クレー・センターでは、この類い稀なコレクションから順次選ばれた作品が、編年的に紹介されています。



関連イベント

※申込方法の詳細は当館HPをご覧ください。

①講演会

「パウル・クレー 転換するコンステレーション」

◎日時:6月21日(土)14:00~15:30(開場13:30)

◎講師:黒田和士氏(愛知県美術館学芸員・本展企画者)

◎会場:当館多目的室 ◎参加料:無料

◎定員:70名[応募多数の場合は抽選]

◎申込締切:6月5日(木)必着

②スペシャルトークショー

「きこえる絵、みえてくる音楽」

◎日時:7月12日(土)14:00~15:30(開場13:30)

◎登壇:いしいしんじ氏(作家)

◎会場:当館多目的室 ◎参加料:無料

◎定員:70名[応募多数の場合は抽選]

◎申込締切:6月26日(木)必着

③当館学芸員によるスライドトーク

◎日時:7月20日(日)14:00~(40分程度)

◎会場:当館多目的室 ◎参加料:無料

※申込不要、先着順。当日会場へお越しください。

④ミュージアム・コンサート

◎日時:6月29日(日)15:00~(開場14:30)

◎会場:当館多目的室

◎参加料:1,500円(全自由・チケット制)

※5月23日(金)10:30より当館受付にて販売

※定員になり次第販売終了 ※未就学児不可

◎定員:60名

◎出演:瀬川裕美子(ピアノ)

曲目:I. ストラヴィンスキー:タンゴ

W. A. モーツァルト:ロンド K. 494

P. ブーレーズ:ピアノ・ソナタ第3番~

コンステラシオン-ミロワール ほか

主催:静岡音楽館AOI、静岡市美術館

次回展覧会 「柚木沙弥郎 永遠のいま」

8月16日(土)~10月13日(月・祝)

静岡県立美術館展覧会

「これからの風景 世界と出会いなおす6のテーマ」

7月5日(土)~9月23日(火・祝)

問合せ:TEL:054-263-5755 静岡市駿河区谷田53-2



《バラの風》

1922年

パウル・クレー・センター(リヴィア・クレー寄贈品)



《電車》 JR静岡駅北口より地下道を利用して徒歩3分

静岡鉄道新静岡駅より徒歩5分

《新幹線》東京駅・名古屋駅から東海道新幹線ひかり号で約1時間

新大阪駅から東海道新幹線ひかり号で約2時間

《車》 東名静岡ICより約15分

※お車でのお越しの際は、近隣の駐車場をご利用ください。

《空路》 富士山静岡空港より静鉄バス

(静岡エアポートライナー)で約1時間

〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー3F

tel. 054-273-1515 (代表) www.shizubi.jp